

## 愚直に生きるということ

—「2017年度京生研基調」を読んで—

滝花利朗

《編集部からは基調への応答をとということでしたが、いつものことながらエッセイのようなものになってしまいました。でも、若い仲間が文責を担い論議した昨年度・今年度の基調を読んで、「すごいなあ。30代のころ、僕にはこのような基調は絶対には書けなかった。文責者を初めとする今の京生研の若い仲間は、すごいなあ」と思いました。僕はお世辞を言うのがとても苦手、というか、いやな人間です。これまで京生研内で実意のないお世辞を言ったことは一度もありません。ですから、「すごいなあ」というのは、ほんまにそう思っているのです。》

京生研大会から帰り、ようやく手にできた『Kの世界』（2017春号86号）で梶原秀明さんの連載「巡り来て、なお（3）」を読み、翌日にはMLにアップされた同（4）を読み、圧倒された。圧倒されたのは、一言で言えば、その活動の幅広さと豊富さであった。こんな活動、僕は出来なかった。「すごいなあ！梶原さんって、こんなすごい人だったのか！」僕は読後しばらく梶原さんを遥かな高みに見上げた。「しばらく」というのは、つぎのことに思い至ったからである。「すごい」、けれど、梶原さんは、自分が高みに見られることをよしとするような人ではない。この連載の内容、とりわけ、その文体から直感できる誠実さは、並みの地平にいて読む者に語りかけている。そう思って読み直し、例えば次のような個所で、僕は、梶原さんと同じ地平にいると思直した。

いろいろあるが、大きいのを三つだけ挙げれば、「巡り来て、なお（3）」では「第三章 何人の子どもたちを救えるのか」の「1 隆とその父」と「2 困難な学年と向き合っつて」。「巡り来て、なお（4）」では、「夢二」の実践。

共通しているのは、実践が「うまく」いかなくなり、苦しみ悩みながらも、担任を持ちつづけ、その苦悩の中から子ども・親への理解を深め、学び、次へのステップを踏み出していったこと。「夢二」の実践では次のように語られている。

《夢二は母親が17歳の時に産んだ子です。母子家庭でした。2年時には、友達とのトラブルや虞犯行為が頻発しますが、次第に母親の対応が投げやりになってきました。私はそんな母親の対応の裏にある思いに共感できず、夢二を突き放そうとしだし、母親との関係も悪化します。そんな、夢二とのかかわりを北部実践検討会で京生研の仲間に分析してもらい、以下のような指摘を受けました。

- ①夢二の立場に立てていない。南陵中・福知山市の管理的な流れに飲み込まれてしまっているのではないか。
- ②母親はがんばっている、もっと母親を励ます立場に立つべき。
- ③子ども同士の関わり方の手本を示すのは、まず教師である。
- ④進路にどう取り組むか、具体的な取り組みを始めるべき。

この指摘を受けてから、母親の足りないところを責める姿勢を改めて、母子家庭だからハンディがあって当たり前、教師はそのハンディを補う立場に立つべきだと発想を転換しました。(後略)》

僕が梶原さんと同じ地平に立っていると思ったのは、僕も、実践的には「うまく」いかないことの連続で(梶原さんは「連続」ではないけれど)、そのたびに苦しみ悩み、「明日どうしよう、どうしよう」と迷いつつ、何とか退職まで生き延びてきたと思うからだ。

ベテランという言葉があるが、これは経験豊富な人という意味であって、エキスパート(熟練者)とは違う。エキスパートになると失敗はほとんどないが(というより失敗しないからエキスパートなのだが)、ベテランはいくつになっても失敗したりつまずいたり、うまくいかない。とりわけ教育実践ではそうだ。人間相手の仕事だし、その人間は毎年変わる。いや日々変わる。単なる経験だけでは太刀打ちできないのが教育実践である。だからベテランと呼ばれる年になっても、悩み苦しみ迷いつつ明日を迎える。

そう思ったとき、久しぶりに「愚直」という言葉が浮かんできた。

愚直という言葉は、数年前まで、それほど思い入れして使う言葉ではなかった。どの辞書を引いても出てくる「バカ正直」といった意味での一般用語であった。ところが、これはすでに京生研で何度か言ってきたことだが、数年前の近畿地区学校で、講師に来ていただいた方から、「京生研はずっと『K』を軸とする集団づくりを愚直に追求してきました」と言われた。瞬間、20年近く同じテーマを掲げ続けていることを揶揄されているように感じた。反発さえ覚えた。話の内容は忘れたが、「愚直」という言葉が強く記憶に刻まれた。今思えば、僕は「愚直」の「愚」の方に強く反応したのだった。

この語は、一般に、ある人やことへの評価として消極的(否定的)にも積極的(肯定的)にも用いられるが、それまでの僕は、消極的な意味で理解していた。だが、辞書を引き引き考えるうちに、決して揶揄と感じたりや反発を覚えたりしないでもよい言葉だと思うようになった。そして、あの講師も、積極的な評価として「愚直に」と言ったのにちがいないと修正した。

「愚直」の「愚」は形容語であり意味の重点は「直」にある。直訳すれば「(他者か

らは) 愚かと思われるほど正直に」ということになる。この時、「他者」とは誰か? それは、『K』を軸とする集団づくり」の必要性・重要性を理解してくれない人たちである。もちろん、その無理解の理由の多くは、実践の自由を抑圧し『K』への理解・支援を矮小化する学校内外情勢と、それを切り拓いていくべき僕たちの活動・実践の弱さにあり、他者の個人個人にはない。けれども、無理解ゆえに無関心になる他者とは違って、中には、『K』を軸とする集団づくり」に対し、敵意をもってこれを排除しようとする他者もいる。

「梶原さんと同じ地平」というのには、もっと直截的な意味がある。それは文字通り「平の地」ということであり、「平(ヒラ)の教師として生き続ける」という意味である。言い換えれば、それは、子どもと直に接する最前線に居つづけるということである。実践的に「うまく」いかず苦しみ悩み、「明日どうしよう、どうしよう」と迷うのは、最前線という「平の地」に居るがゆえの具体的な苦しさ・悩み・迷いであり、「平の地」を脱すればそれらは解消される。子どものことを思い、ふがいない自分を思って、心が疼くことはなくなる。だから、今日、担任として生き、重い課題を背負わされた子どもを軸とする学級づくり・学校づくりを続けること、「平の地」にいて教師生活を全うすることは、「平の地」から登って行った者や、もともと別の場所にいる者には、「愚」な生き方と見えるであろう。

しかし、「愚直」の実意は「直」にある。そして、その「直」は、「他者は愚かと思うかもしれないが、自分は正直に」ではなく、「他者からは愚かと思われるほど正直に」、すなわち、真っ正直に、の「直」である。「ウルトラ直」である。

これは、『基調』が牧本実践に言及して取り出している「絶対に見捨てない覚悟」や「信念」や「見通し」と重なり、『基調』最後に引用された上間陽子さんの「腹をくくって」に結びつく。

40年近く前、新任から4年間の長二中を終え上林中へ赴任した時の個人的な経験。当時上林中は10年ほど荒れが続く困難校だった。3年間勤務すると自動的に1号俸アップする僻地校でもあった。だからかどうか、多くの教師は3年たつと異動していた。

異動発令前の3月下旬、生指主任の先生から連絡があり、家の近くの食堂で打ち合わせをした。学校の状況説明を受け3年担任と生徒会担当を要請された。10数人の職員半数が入れ替わるということだった。4月着任の日、村上肇校長は、「この学校をなんとかして落ち着かせたい。君が良かれと思うことは何でもやってください。尻拭いは

私がする。」僕は勇気を得て、良かれと思うことを次々と生徒会活動や学級に取り入れていった。新1年に「大物」が2人もいて、3年も含む全ての男子がこの「大物」の影響下にあったため、「普通の学校」になるには3年間かかった。この間に村上校長は舞鶴の白糸中に異動され、その後、綾部市の教育長になられた。設備改善を願う組合交渉では僕たちの要求に耳を藉してくれた。

上林中の後、八田中に赴任した。2年目の3学期頃からメチャクチャに荒れた。美術室などの窓ガラスや腰板がほとんど破壊され、PTA総出で修繕してもらった。子どもたちもメチャクチャだったが、僕の実践もメチャクチャだった。3つのツッパリ学習会を毎週もった。トップのY君とは放課後毎日のようにドライブした。ドライブ中、彼は「普通の子」だったが、学校に来ると人格が変わるようだった。3年夏休み、Y君と生徒会リーダー2人を連れ、富士山5合目まで走り、彼らは8合目でダウンした僕を置いて登頂し合格祈願した。これが養護教諭にバレてしまい、「それが全生研のやり方なんですか！」と叱られた。「いや、僕のやり方です。」と言うしかなかった。梅原弥生校長からは何も言われなかった。

困難校と聞いていた白糸中から来られた梅原校長も度量の大きい人だった。大荒れしていた2年生の終わり、ある子どもたちが教室の窓ガラスを箒の柄で割っていくのを制止できず、職員室へ戻り受話器をとり、目の前の校長に「110番します。いいですね！」と言ってダイヤルを回しかけたとき、「滝花君、待ってくれ！」と止められた。「待ってくれ。まだ私たちにやるべきことがあるかもしれない。まだあるかもしれない。」

3年後半、彼らはすっかり落ち着き、卒業式後の謝恩会で全員がくれたメッセージの中に、ある子が次のように書いていた。「2年終わりから3年初め、なんであれだけメチャクチャ荒れたのか僕にも分かりません。でも、金属バットをもって校内を見回れとか警察に任せるとか言う親の声を無視して、僕らを見守り続けてくれた先生たちは、尊敬もんです。」これを読んで、僕は梅原校長の電話制止に感謝した。

梅原弥生さんも村上肇さんも故人となられた。二人とも度量が大きく、誠実な方だった。職員に対してだけでなく、何よりも、子どもたちに対して。そして、二人とも、管理職になれる前は、絶対に優れた実践者であったはずだ。

では、当時の学校の枠の広さは、二人のような度量のある管理職だったから保たれていたのか、というと、それだけではない。むしろ、子どもたちの荒れの大きさと、それを指導によって克服していきたいという教師たちの願いの強さが、枠を内側から外へと広げており、校長の度量もそれに依拠していたのではなかったか。そして、簡略過ぎる言い方だが、そのような願いをもつ仲間が多くおり、そのつながりによって教師一人ひ

とりの子ども観も寛容的であったのだと思う。学校の枠の広さは、これらの教師の子ども観と実践の豊かさによって創られていたのだと思う。

今、職場に、このような校長や多くの仲間を期待することは無理だろう。校長についてだけ見ても、個人的に、また人間として、いかに誠実で寛容な人であっても、現在の管理職登用制度は、そんな個性・人間性を打ち捨てなければ登用されないものになっている。

かつて子ども観・教育観を共有したKさん。数年前に校長として退職したが、彼女が教頭へと舵を切ったとき、僕は「事後相談」として話を聞いた。舵を切る前、当然のことのように組合は退いていた。決定的決断の後での相談など相談ではないので、僕は耳を藉すというのではなく聞いていた。

Kさんはその時、次のようなことも言った。「この間、局面接で言われました。『管理職を目指されるのですから、あなたのこれまでの考え方をすべて捨ててください。人格を変えてください。これからのあなたの公的な発言は、すべて教育委員会の言葉だと思ってふるまってください』と。」

「へえーっ、すごいですね。むごいですね。できるのですか？」Kさんが何と答えたか覚えていない。もう、どうでもいい気がしていた。彼女は僕の仲間ではなくなった。Kさんは「愚直さ」を捨てたのだ。

※上記のKさんの言ったような面接が事実あったかどうか確かめようはない。しかし、僕の記憶の中には今も鮮明だ。ただ、今は、ひょっとするとKさんは、僕向けに自分のアリバイ（責任不在証明）として、もしくは自分の思想的内部葛藤を薄めるために言ったのではないかという気もしている。また、今の局面接ではこれほどのエグイことは言われなくてもいいかもしれない。でも、「あなたの公的な発言は、すべて教育委員会の言葉だと思ってふるまってください」は、今なお「平の地」から登用されていくための絶対条件である。

学校の内側から個性（いろんな人間がいるし、いてもいい＝個別性尊重）や人間性（人間って弱いものだ、失敗もするし、傷つくこともある、だから他者に依存しながら自立をめざす＝人間の本質である脆弱性「ヴァルネラビリティ」）を捨象して制度化・システム化したところに、今の学校の枠の縮小・狭量化があると思う。制度化・システム化の究極は機械化だろう。ヒューマンエラーを失くすための機械化。徹底的なムダの排除。10年ほど前、当時の市教育長が学校教育関係広報誌で述べた言葉も思い出される。

「不登校は教育的赤字である。」

成果を生み出す機能重視の制度化・システム化を推進する者たちからすれば、『K』や不登校にかかわりつづける僕たちの実践は、「愚直」としか見えないだろう。『基調』の「少年期を取り戻そう」の主張も「愚直」と見なされるかもしれない。いや、語法を間違えた。「愚直」とは本来肯定的評価を示す言葉なのだから、彼らがそんな評価を下すはずはない。そこではすでに「直」が捨てられ「愚」としてしか見られていないにちがいない。「時代にそぐわぬ愚か者の実践」「バカな実践」「何の役にも立たぬ実践」「独りよがりの自己満足の実践」等々。

これに関わって知りたいのは、海田実践や川崎実践の職場での評価である。管理職やシステム化推進者からの肯定的評価など期待すべくもないが、まだ「平地」にいる同僚たちの視線はどうなのか。温かいのか冷たいのか。もしも冷たいまなざしの中で孤軍奮闘されているとすれば、海田実践の学級内クラブ⇒学級外活動へと展開する少年期保障の取り組みも、『K』を軸とする集団づくり実践の排除と同様の扱いを受けていかないかと危惧する。狭量化に抗い枠を広げるには、やはり同僚の支持が必要だ。だが、多くの職場では、当面は孤軍奮闘せざるをえない状況だろう。

だとすれば「愚直」に徹するしかない。かつて大西忠治が、担任も持てない孤立無援の中、唯一担当できた放送部で核づくりを進め、そこで育った核たちが各学級へ散って学級づくりを始め、やがては全校集団づくりへと発展していったように、集団づくりへの愚直なまでの信念と執着と見通しは、大きな連帯を創り出すことができる。可能の根拠は、子どもたち、親、そして同僚たちに、そうなりたいという要求が眠っているということだ。どんな人間であろうと、他者と手をつなぎ合いたいと思っているはずだ。とりわけ、不登校の子や『K』たち、その親たちはそうだろう。牧本実践で、タツヤの父親は懇談で「絞り出すような声で」自分の苦悩を語る。それに耳を藉す牧本さん。耳を藉す存在になれるということが、共闘の始まりなのだ。

ジュディス・ハーマンはPTSDを生む処遇の基本要因として孤立化と無力化を挙げていると思うが、この孤立化と無力化は、たとえPTSDまで至らなくても、今日の学校での多くの子どもたちに共通する扱いではないだろうか。孤立化・無力化「させられる」子どもは、「自分は一人ぼっちだ、自分には力がない」と思い込んでしまうだろう。孤立化・無力化「させる」側は、学力競争、国家（学校規範）への忠誠競争を通して、「仲間を信じるな、頼りになるのは自分だけだ、こんな点数ではダメだ、まだまだ努力が足りない」と言い続ける。これに絡めていうと、『K』を軸とする集団づくりや「少

年期を取り戻そう」とする学級集団づくりは、この子どもたちの孤立化と無力化に抗う実践であるとも言える。

京生研は20数年間、年度ごとに基調提案を更新しつつ、「最も重い課題を抱えた子どもを軸とする集団づくり」を基底テーマのように愚直に持続してきた。それは学校の内外情勢が変更を要しなかったからである。それは、一見めまぐるしく変わっていく教育状況の中でも、一貫して変わらない基本状況が続いているからだとも言える。

近接してミクロ的に見れば変転極まりないように見える世界も、マクロ的に遠望すれば、それほど変わってきたわけではない。戦後日本の教育状況は、直後の数年間を除き、基本的に変わっていない。いや、沖縄の歴史がそうであるように、明治以降、変わっていない。それは、ずっと、マイノリティー排除の教育だったし、今もそうだということだ。

念押し言うが「愚直」の「直」とは正直ということ。子どもや親の願いを正直に受けとめながら、自分の良心に対して正直に生きること。

正直の反対は、自己欺瞞。ごまかし。それは、実践が「うまく」いかなかった時、自分の良心の声と子ども・親の願いの声を聞きつづけることをやめ、自分を可愛がってくれる自分の声に包まれ、それをよしとすること。しかし、欺瞞は虚しい。現場を離れて顧みたとき、その虚しさに気づかされる。僕にも自己欺瞞で過ごした時があった。その日々は虚しい。

だから、若い仲間には、ぜひ、「わが人生に悔いなし」の前段階として「わが教師生活に自己欺瞞なし」として教師生活をつづけてほしい。子どもと同じ「平の地」で、「愚直に」生きつづけてほしい。

『2016年度近畿基調』と『2017年度京生研基調』の結語をドッキングさせて終わりとします。

《全生研に集う教師たちは、苦悩や苦境のなかにこそ希望があることをその実践と理論を通して明らかにしてきた。今日の子もたちやわたしたちが著しい苦悩や苦境のなかにいるということは、そこに必ず希望があるということである。いまや、その希望を生み出していく順番がわたしたちに回ってきた。》《腹をくくって実践することが今の私たちには求められている。》

2017. 7. 7